



TITLE:

經濟雜話第五

AUTHOR(S):

田島, 錦治

---

CITATION:

田島, 錦治. 經濟雜話第五. 經濟論叢 1916, 3(2): 127-132

ISSUE DATE:

1916-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127060>

RIGHT:

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號二第

卷三第

## 論說

國防税ノ本質

でうあつぎ・ひゆーむノ經濟學說(四)

資本ノ眞概念ノ發展(三)

戦後ノ人口増加政策(二)

支那近代ノ戸口ニ就テ(三完)

在外正貨ト兌換券ト關係ヲ論ズ

## 雜錄

服部氏著國際經濟論ニ對スル向井氏ノ批評

瀧本誠一氏ノ草茅ノ解題ニ就イテ

福田博士ニ答フ

戰時利得税ノ諸學說及實例

英吉利ノ新税

米國ニ於ケル船舶買收法案ニ就テ

經濟雜誌第五

統計書ノ概說

らうれー『ミール』學說ノ研究(三)

『通俗經濟文庫』ノ刊行

『經濟大辭書』ノ完成

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 徳三

法學博士 河上 肇

文學博士 米田 庄太郎

文學博士 内藤 虎次郎

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 鈴木 券太郎

法學博士 本庄 榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 岸本 熊太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

商學士 大塚 金之助

法學博士 福田 徳三

法學博士 神戸 正雄

(載 轉 禁)

## 經濟雜誌第五

田島錦治

(十二)家婢ノ拂底―(十三)商人ノ懸直ニ就テノ古キ一考證―  
(十四)唐人樂唐卿ノ詩ト獨人ぶるの―、ひるでぶらんごノ經濟說

### (十二)家婢ノ拂底

近年我國各都會ノ中流以上ノ家庭ニ於テ家婢拂底ノ聲ヲ聞クコト漸ク多シ而シテ此聲ハ歐洲ニ於テ更ニ大ニシテ米國ニ於テ最モ甚シキモノノ如シ此家婢供給ノ減少ニ伴ナヒテ其給金ノ騰貴

セルコト亦甚タシク而シテ其割合ハ他ノ何レノ職業ノ給金ヨリモ大ナリ即チ日本帝國第三十四統計年鑑(第百二十二表)ニ依ルニ各種賃金ノ指數ハ明治三十三年(西曆千九百年)ヲ百トスレハ其總平均ハ明治四十年(一九〇七年)ニ於テ百三十四、一ニ上リ大正二年(一九一三年)ニ於テ百六十、八ニ上リタレドモ家婢ノ賃金ハ前記各年ニ於テ百ヨリ百五十五、八ニ上リ次ニ百九十一、七ニ上リタリ今女子各種職業ノ賃金指數ヲ對照スルニ

	一九〇〇年	一九〇七年	一九一三年
農作年雇女	100.0	123.4	181.1
農作日雇女	100.0	125.8	151.6
養蠶職女	100.0	130.1	142.4
蠶絲繰女	100.0	135.0	154.0
機織女	100.0	110.0	130.0
下女	100.0	115.8	121.4

此表ニ依レハ家婢給金増加率カ他ノ傭賃金ニ比シテ最モ大ナルヲ知ルヘシ而シテ今更ニ同年鑑(第九十九表)ニ依ルニ全國工場ニ使役セラルル男女職工一人一日ノ賃金ハ左ノ如シ

	一九〇〇年 (明治三十三年)	一九〇七年 (明治四十年)	一九一三年 (大正二年)
十四歳以上(男)	三元	四元	六元
十四歳以上(女)	二元	三元	四元
十四歳未満(男)	二元	三元	四元
十四歳未満(女)	一元	二元	三元

	一九〇〇年	一九〇七年	一九一三年
十四歳以上(男)	100.0	121.4	142.4
十四歳以上(女)	100.0	110.0	130.0
十四歳未満(男)	100.0	115.8	135.0
十四歳未満(女)	100.0	105.0	121.4

此表ニ依ルトキハ全國工場ニ使役セラルル男女職工ノ賃金ハ一九〇〇年乃至一九一三年ノ十三年間ニ於テ其十四歳以上ノ者ニ在リテハ四割三分ヲ増加セルヲ知ル之ヲ同年期間ニ於ケル家婢ノ給金ノ九割ヲ増加セルニ比スレハ其増加率ハ二分ノ一ニモ及ハサルナリ

然レドモ家婢ノ絶對的給金ノ額ハ之ヲ工女ニ比スレハ今日モ尙低キモノノ如シ今我國最大工業地ノ一ナル大阪市ニ就テ工女ト下女トノ給金ヲ比較スルニ左ノ如シ(第十三回大阪市統計書ニ依ル)

工女ノ類別	最多	最少	平均
織維及染織工業	八〇	八	二六
機械工業	五〇	七	二六
化學工業	六〇	二二	二六
飲食工業	五〇	二〇	二六
雜工業	七〇	六	二六
特種工業	四〇	二五	元

總平均 六〇 六 七  
 前表ハ大正二年ニ於ケル各種工女ノ平均賃金ヲ示シタルモノナルカ之ニ依レハ大阪市ノ工女ノ賃銀ニ最も多キハ一日ニ八十錢最少ナキハ六錢ニシテ平均二十七錢ナリ（前掲大阪市統計書第三百六十六表ニ依ル）

然ルニ同市大正二年ニ於ケル下女ノ給金ハ月給賄付ニテ最高五圓二十九錢最低三圓普通ハ四圓ナリ（前掲 阪市統計書第二百六十八表ニ依ル）固ヨリ家婢ハ其貨幣的給料ノ外ニ食ト住トノ實物的給料ヲ受クルヲ以テ通常單ニ貨幣的ノモノヨリ成レル工女ノ給料ト比較スルハ頗ル困難ナリト雖前掲ノ統計ニ依リテ我國ニ於ケル下婢ノ給金カ工女ニ比シテ稍下位ニ在ル事ハ之ヲ肯定スルヲ得ヘシト信ク然ラハ現今我國ニ於ケル家

婢ノ拂底及ヒ其給料ノ騰貴ノ著ルシキ所以ハ蓋シ工業ノ進歩ニ伴ナヒ工女ノ需要ヲ増加シ隨テ其賃金カ騰貴シタルモノ是レ其最大原因ナリト謂フヲ得ヘキニ似タリ其證據ニハ下女ノ拂底ハ大阪市ノ如キ大工業都會ニ最も甚シクシテ隨テ下女給金騰貴ノ割合ハ最も大ナルヲ見ル即チ左表ノ如シ（前記大阪市統計書第二百六十八表ニ依ル）

大阪市下女月給（附付）

	最高	最低	普通
明治三十三年	二・〇〇	一・〇〇	一・三〇
明治四十年	四・五〇	二・〇〇	三・五〇
大正二年	五・五〇	二・〇〇	四・〇〇
大正三年	五・九〇	二・〇〇	四・〇〇

此表ニ依ルトキハ一九〇〇年乃至一九一三年ノ十三年間ニ於テ大阪市ニ於ケル下女ノ普通ノ給金ハ百ヨリ二百六十六、六ニ増加シタルモノニシテ前掲全國ノ下女給金指數カ同期間ニ於テ百ヨリ百九十一、七ニ増加シタルモノト比較セハ以テ余ノ斷定ノ大ナル謬ナキヲ證スルニ足ラン

然レトモ歐米特ニ米國ニ於ケル家婢拂底ノ原因

ハ大ニ我國ト事情ヲ異ニスルモノノ如シ請フた  
うしつく氏ノ語ヲ假リテ之ヲ證セン氏ハ曰ク米  
國ニ於テハ工場又ハ店舗ニテ働ク所ノ婦人又ハ  
少女ハ下婢ヨリハ安キ給金ヲ受ク縱令貨幣ニテ  
受ケ取ル給料ノ額ハ兩者往々略ボ同一ナレトモ  
家婢ハ此上ニ食ト住トヲ受クルヲ以テ其全體ノ  
給料ハ遙カニ大ナリ而シテ其重ナル理由ハ米國  
ノ如キ民主的社會(a democratic community)ニ  
於テハ婢僕ノ勤務ハ卑屈ニシテ嫌惡スヘキ性質  
ノモノナリ蓋シ店舗ニ働ク少女ハ家婢ヨリハ長  
キ時間劇シク働クコト往々コレ有レトモ其仕事  
ハ彼ノ如ク從人的ナラズシテ其時間ハ嚴密ニ定  
マリ一日ノ仕事カ畢レハ其身ハ全然自己ノ自由  
ナリ歐洲諸國ニ於テハ自由ノ精神及ヒ平等ノ念  
カ米國ニ於ケルカ如ク大ナラサルカ故ニ前述ノ  
如キ理由ハ尙ホ薄弱ナリ故ニ彼ニ於ケル家婢ノ  
給料ハ我ニ於ケル如ク高カラズ米國ノ富裕階級  
ノ家庭主人ハ徒ラニ家婢ノ拂底ト其給料ノ高キ  
トニ就テ苦情ヲ唱ヘテ是レハ民主的精神ノ當然  
ノ結果ナルノ點ニ想ヒ到ラズト (Tausig Prin-

iples of Economics II. 1911, page 125)

(十三) 商人ノ懸直ニ就テノ古キ一考證

我國古風ノ商店ハ今尙ホ「現金懸直ナシ」ト染出  
セル幕ヲ前ニ掲クルアリ又ハ「懸ケ賣時貸一切  
不仕候」トノ紙「ビラ」ヲ店ノ天井ニ下クルアリ  
支那ノ都會ニハ不二價ノ看板ヲ掲クル商店多ク  
歐洲ニテモ往々 Nur Ein Preis ヲカ Prix fixe ト  
カ Fixed Prices! No Abatement! ナドノ語ヲ店  
頭ニ掲クルモノヲ見ルヘシ抑モ商人カ懸直ヲ爲  
スノ惡風ハ古今ヲ通シ東西ニ亘リテ行ハレタル  
モノノ如ク而シテ其支那ノ古典ニ見ユルハ余ノ  
識ル所ニテハ荀子ノ儒效篇ニ秦ノ昭王カ孫卿子  
卽チ荀子ニ儒者ハ國ニ無益 モノナリヤト問  
ニ答フル辭ノ中ニ「仲尼將<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>司寇<sub>一</sub>沈猶氏不<sub>ニ</sub>  
敢朝飲<sub>ニ</sub>其羊<sub>一</sub>公慎氏出<sub>ニ</sub>其妻<sub>一</sub>慎潰氏踰<sub>ニ</sub>境而徙<sub>一</sub>  
魯之粥<sub>ニ</sub>牛馬<sub>一</sub>者不<sub>ニ</sub>豫買<sub>一</sub>」トアリ是レ卽チ荀子  
カ儒者ノ效益ヲ説キタル一節ニシテ孔子カ魯國  
ニ仕ヘテ司寇ノ官ニ就キ宰相ノ事ヲ攝行セント  
スルヤ從來羊ニ朝早ク水ヲ飲マシメ乳量ヲ多ク  
シテ市人ニ詐リタル沈猶氏ハ懼レテ此不正行爲

ヲ止メ公慎氏ハ其淫亂ナル妻ヲ去リ從來法度ヲ踰ヘテ奢侈ヲ行ナヘル慎潰氏ハ他國ニ逃レ移リ而シテ魯國ニ於テ牛馬ヲ販賣セル者ハ豫買セズ即チ懸直ヲ爲サザリシトナリ買ハ價ト同シク豫買ハ高價ナリトイフ說ト豫ハ誑ノゴトシトイフ說ノ兩說アレドモ畢竟懸直ノ事ナリ孔子家語ノ相魯篇ニ「孔子爲<sub>レ</sub>政、三月、則<sub>レ</sub>鬻<sub>二</sub>牛馬<sub>一</sub>者不<sub>レ</sub>儲買」トアリ蓋シ同事ヲ謂フナリ儲ハ奢ト古聲相近クシテ說文ニ奢ハ張ナリトアリ然レハ儲買ハ誇張セル價ニシテ即チ懸直アリ又司馬遷ノ史記循吏傳ニ「子產爲<sub>レ</sub>相、市不<sub>レ</sub>豫買」トアリ子產ハ鄭國ノ賢臣ニシテ孔子ヨリ前ノ人即チ孔子カ三十歳ノ時歿セル人ナリ此等ノ記事ニ徴スレハ春秋時代ノ支那ノ商人間ニ懸直ノ惡風カ一般ニ行ハレタルハ明カナリ故ニ齊ノ管仲カ著ハシタリト稱セラルル管子ノ乘馬篇ニハ誠買ノ說アリ曰ク「非<sub>レ</sub>誠買、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>食<sub>一</sub>子買、非<sub>レ</sub>誠工、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>食<sub>一</sub>子工」云々ト所謂誠買ハ正直ナル商人ヲイヒ懸直ヲ爲スカ如キ者ニ非サルハ明カナリ又同書國蓄篇ニ「歲有<sub>二</sub>凶穰<sub>一</sub>、故殺有<sub>二</sub>貴賤<sub>一</sub>、令有<sub>二</sub>

緩急、故物有<sub>二</sub>輕重<sub>一</sub>然而、人君不<sub>レ</sub>能治、故使<sub>二</sub>賈游<sub>一</sub>市、乘<sub>二</sub>民之不<sub>レ</sub>給<sub>一</sub>百倍其本」トアリ所謂蓄買ハ賈占ヲ爲ス商人ナリ茲商カ米穀ノ賈占ヲ行ナヒ其價ヲ高クシテ不義ノ利ヲ占ムルノ弊ヲ痛言セルナリ是亦豫買ノ一例ナリト謂フ可キ歟

漢ノ桓寬ノ著ハシタル鹽鐵論ノ力耕篇ニ曰ク「古者商通物而不<sub>レ</sub>豫、工致牢而不<sub>レ</sub>僞」トアリ又同書禁耕篇ニ曰ク「國富而教之以禮、則行<sub>レ</sub>道有<sub>レ</sub>讓、而工商不<sub>レ</sub>相豫」トアリ是ニ由テ之ヲ觀レハ漢ノ時代ニ於テモ懸直ノ惡風賈占ノ弊害ノ盛ナリシヲ知ルナリ序デ乍ラ我國徳川時代ノ商人間ニ懸直ノ行ハレタル證據トシテ文化二年頃ノ川柳狂句ノ一二ヲ舉クベシ

直きにまけたで女房はちつと買ひ  
はしむおきると二階でひなをまけ

(十四)唐人葉唐卿ノ詩ト獨人 Bruno Hildebrand ノ經濟說

近世獨逸ノ歴史派經濟學ノ創立者トシテ Karl Kries, Wilhelm Roscher ノ二氏ト并ヒ稱セラル

ル所ノ Bruno Hildebrand (一八二二年乃至七八年)ハ始メテ經濟ノ三時期ヲ區分シ第一實物經濟 (Naturalwirtschaft) 第二貨幣經濟 (Geldwirtschaft) 第三信用經濟 (Kreditwirtschaft) ト爲シ而シテ此區分ハ經濟學者ノ一般ニ廣ク採用スル所ナリ (Br. Hildebrand, Jahrbücher für Nationalökonomie, Jahrg. 1864) 然ルニ余曾テ唐詩ヲ讀ムニ葉唐卿ノ漁父ノ詩アリ曰ク

網裡無魚無酒錢。酒家門外口流涎。幾回欲解蓑衣當<sub>上</sub>。又恐明朝是雨天。

僅々二十八字ニシテひるでぶらんどノ謂ユル三種ノ經濟ヲ包含スルノミナラス而カモ其眞理ヲ有韻ノ畫ヲ以テ面白ク趣味深ク拙キ出セルハ實ニ一誦三嘆ヲ值ス謂ユル網裡無魚ハ是レ實物經濟即チ魚ヲ以テ酒ニ換ユル交易ノ行ハレ難キヲイヒ謂ユル無酒錢ハ是レ漁父ノ囊中錢無クシテ貨幣經濟即チ錢ヲ以テ酒ヲ買フ能ハサルヲイヒ而シテ謂ユル欲解蓑衣當<sub>上</sub>ハ是レ信用經濟ノ行使即チ漁父カ其着ル所ノ蓑衣ヲ脱キテ抵當即チ質ト爲サント欲スルヲイフナリ